ベシ・マジの接續面の混亂

橋本四郎

（一）

言語に對してその主體たる人間はある意識をもつ。もっとも意識のもつ一般的な性格としてそれは個別的なものであり、しかも多くは反省を伴はない潜在的なものである。けれども言語が社會的な約束である以上、ある程度の普遍性も備へてゐると見なければならない。この中には時代を貫く一本の脈として流れつづけてゐる意識もあらうし、一方では變化を常とする言語の性格に伴って變化流動する意識もあるはずである。

このやうな意識の實際の探究法としては、言語現象を通じてそれに作用する力を假定するといふ形をとらざるを得ない場合が多く、直接的に捉へることは極めて困難である。このやうにして捉へられた意識の中何が變らないものであり、何が變って行くものかを見わけることは更に困難な仕事であるが、新しい言語現象は變らぬ意識と變って行く意識のからみ合ひの上に形成されて行くと考へられるから、たとひ說明のための假定といふ面は免れ難いにせよ、意識の問題を考へておくことは甚だ重要な意味をもつと思ふ。

この觀點を裏にふまへて、ベシ・マジの接續といふ一局面をとらへ、これらが新しい接續面を獲得して行く過程をいちおう筋道立てて見たい。

（二）

助動詞ベシ・マジ(1)は、古代語の世界ではいはゆる靡のルのつかぬゥ列音、卽ち終止形といふべき形に接したが、院政期以後になると、二段系の活用の動詞に對してそのイ列又はエ列で終る形——未然形と見うる形に接したものが現れる。室町時代になるとこの形がむしろ普通になり、漸次このまゝで定着に向ふやうである。この間四段系の動詞に對しても、アハマイ、キカマイのやうに未然形に接續したものが見られる(2)が、用例の拾へる範圍がごく狹い上、現はれる時期も短い。從ってこれはごく一時的且つ局部的現象に終つたものと解せられる。

ベシの方はマジのやうに定着しなかったかに見えるのは、近代語の中央語における兩語の生活力の差といふ點にその原因を求めることができよう。從來、ベシ・マジは併行的に動いて來たにも拘らず、落チマイ・上ゲマイを素直にうけとれる吾々が、たまたまベキを使用するに際して、落チベキ、上ゲベキを使はず、落ツベキ・上グベキもしくは落チルベキ・上ゲルベキを使ふのはこのた

めであらう。

落チベシ・上ゲマジが人々の口の端に上り出した時には、吾々が落チベキ・上ゲベキに對して持つと同様の抵抗があつたことと思はれるが、事實としては今眺めたやうに變なはずの形が定着して行つたのである。そこにはこの抵抗を排除しうるだけの大きな力が原因として働いてゐると考へなければならない。

その原因としては、助動詞自身のもつ性格の中にひそむものも考へねばならないのは勿論であるが、接續といふ現象が上接の語の存在を前提としなければ成り立たない以上、助動詞と上接の活用語との關連の上に立つて問題を追求して行かなければならない面が大きいと考へられる。この點を考察するに先立つて、接續面の變化して行く姿をたしかめて置かう。

言語の變化といふものが、一夜明ければ昨日のいひ方とまるっきり違ったものになって居たといふ性質のものでないことはいふまでもなく、ベシ・マジの接續面にしろ新しい形・古い形、或いはそのどちらでもない第三の形といふ混亂狀態を經た後に、漸次語法として固定して行くものであらう。從って變化し易い場合としにくい場合があるはずであり、しかもこの現象は當然口語の世界から起ったものとせねばならない。ところが現在與へられてゐる口語資料では、殆ど劃一的に未然形接續であるため、どんな場合に變化し易いかを知るための目安として文語資料を利用して見る。文語資料に見られる未然形接續は、文語を書く意識の盲點のありかを示してゐると考へられるからである。今までに求め得た例を羅列して見ると次のやうになる。(3)

比較的多種の文献に亙って見出すことができる。特に二音節の

		マ　ジ	ベ　シ
一音節		せまじき（宇）來まじく（朝）	
二音節	節	捨てまじき（義・花）うけまじき（ぎや・どち）かけまじき（曾）堪へまじきほめまじき（無）ヲチマジ（呉）	捨てべけれども（義）觸れべし（花）かへべし（無）とめべし（今）見せべし（今）かけべし（今）つけべからず（無）ニゲベシあげべし（呉）あげべき（大）つけべし（大）
三音節	節	助けまじ（唐）外れまじき（ぎや）	キコエベシ（長）をぼえべき（沙）尋ねべし（申）預けべからず（今）くらべべし（今）つづけべし（近・長）育てべし（花）傳へべし（磯）もとめべからず（無）
四音節			辨へベキ（長）
身動詞受助動詞		抜かれまじき（宇）切られまじ（義）ヒカレマジ（呉）	見ラレベキ（長）イワレベケレ（長）
役動詞使助動詞		知ラセマジ（長）	いらせべき（今）
詞動詞合複		過ぎわびまじく（三）	着かへべき（義）引合はせべき（文）問ひ合せべき（花）さしあげべし（今）うちつけべし（大）心えべき（近・無）詠ジアゲベシ（長）心得ワケベシ（長）

ものには同一文献に同一例の多いものがかなりある。ざっと目を通したところでは音節數の少い動詞にこの形の出てくる傾向が色濃く現はれてゐるやうである。

次に今と逆の場合として、未然形接續が殆ど一般化した口語文で、元の形が用ゐられるとすればどんな場合かを眺めたい。但しベシに關しては、口語文における用ゐられ方の少さのために「我スベイ事」(毛詩抄)「來朝スベキ者」(史記抄)の二例しか目下の所は見出してゐない。ベシが生き續けた關東の方では、殆どが未然形接續である中にあって、「始むべし」「落つべい」「ふさるべい」が雜兵物語に見える他、同じ物語に「すべい」が「しべい」と並んでほぼ同じくらゐ見られる。

マジの方は(4)

單獨動詞	宥むまじけれ(平)
…まらす	嫌ひまらすまい(平) つきまらすまい(平) 頼みまらすまい(伊)
變動詞 サ動詞	存ずまじい、損ずまじい、決すまじい(平) 信ズマジキ、論スマイ、感スマジケレ(中) 奉公スマジイ(伊)
身受動詞	出サルマイ(中)
役使動詞	討たすまい、取らすまい、遲れ參らすまじい、散らすまじい(平) アラスマイ(中)

サ變動詞の場合に多く見られるのと、二語複合のしかも下の方が多分に接尾語的な場合に多いのが目立つ。サ變の場合は、特に動詞自體が獨自の活用をもち、類型の動きに煩はされることのない點、複合關係が複雜である點などから他の二段系の動詞と一律には考へ難い。受身のルと使役のスとでは傾向が逆になつてゐるが、スの方は四段活用で他動詞になるスと交渉をもつかも知れずこの點はもっと考察を深める必要があるが、ともかく他の要素の添加によって長くなった場合、元の形が殘り易いことだけを指摘しておく。

けれども、特にベシにおいては、文語文で複合動詞の未然形に接したものが多く、一見右の現象と背馳するやうであるが、心ウを除いてはすべて動詞+動詞の構成をもち、兩動詞の意味がそれ程形式化してゐない。これらは一まとまりとすれば長いが、二語意識を保存してゐたとすれば短いといへる。心ウですら、心ヲウとヲによって前後を分たれ得るだけの分離性を保存してゐたのである。そして下の方の動詞自體はそれ程長いものはない。この點から、かかる複合動詞も短いものの群に入れることができさうである。

ところでこの變化が起る前に、活用語においては終止形と連體形とが合一するといふ顯著な變化が起ってゐる。その變化は二段活用の一段化に至って終極に達する。ベシ・マジは通常終止形に接し、ラ變に對してのみその連體形に接するといはれて來たやうに、この活用形に深い關連をもって居た。いはば活用の變化の渦の核心にある形に接したのであり、しかもこの二つの變化が踵を接して起ってゐることは、ベシ・マジの接續の變化に對して動詞の變化が强く働きかけてゐることを豫想させずにはおかない。

終止形・連體形の合一に關しては、更にひとつの興味ある現象が見られる。室町時代に出た辭書を通じて動詞が連體形と同一の形で示されるのは、元の終止形が一・二音節のものに壓倒的に多く三音節になると急に少くなる。その大體を表にすると次のやうになる。表の中の音節數は終止形の音節數、比率は二段系動詞の全

語數に對する連體形と同一の形で示された語の比率である。

	二音節	三音節	四音節
ぎや・ど・ぺかどる字集	100 %	58.2%	28.0%
落葉集本篇	78.2%	31.6%	32.0%
落葉集小玉篇	80.5%	27.5%	27.6%
落葉集色葉字集（見出し以外）	93.5%	47.7%	32.0%
溫故知新書	80.0%	43.9%	31.4%
黒本本節用集	64.4%	25.3%	4.3%
永祿二年本節用集	51.4%	32.6%	18.2%
饅頭屋本節用集	91.9%	50.6%	23.8%
伊京集	85.7%	40.0%	26.7%
易林本節用集	86.3%	23.2%	11.4%
新韻集	61.8%	32.1%	25.6%

これは恐らく短い動詞が不安定で崩れる傾向が強いことを示すか短い動詞では崩れた形の出ることに對する抵抗感が少かったことを示すもので、結局のところ、短い動詞はいち早く新終止形を固定させて行ったものと思はれる(5)。とすれば短い動詞にベシ・マジの接續混亂例が多いことは故なしとしないのであって、動詞の變化に強く影響されてゐることが考へられ、この點からしてもこの二變化の關連はいよいよ密接なものと言はなければならない。

終止形と連體形との合一は、終止形のもつ機能と連體機能との完全な共存を許すことであるために、終止形そのものの質的變化を示すとも考へられる。特に二段系の活用にあっては、新終止形は靡ルのついた形となってゐる。靡の本質を追求された森重敏氏は、連體形は本來修飾・被修飾の關係に關するものであって、その故に特定の助動詞が接續しがたいとされたが（上代國語における靡「る」靡伏「れ」の研究《國語國文十五ノ八》）、特に上代における上一段活用に對する推量の助動詞の接續の如く、靡ルのついた形は積極的に助動詞を拒否しているかの現象さへ見られる。さうすれば、ベシ・マジは終止形の變化とともに早晩この形からふるひ落される運命にあったと考へられ、これが當面の變化の一つの契機となってくる。

この意味で、接續の變化が二段系活用に起り、四段系のものに對しては、これに附隨的に一時的に起ったに過ぎないことは注目しなければならないのである。これらの活用形式をもつ語においては、新終止形が靡を獲得して形の變化が明瞭であるために、ベシ・マジの接するのに都合が悪くなったのといふ事情を想定することができるからである。

けれどもこれを證明する前に、次の前提の成立することが立證されなければならない。即ち、終止形接續が崩れる一方においてたとひ終止形が變っても終止形接續の語は終止形につくのが本筋であるといふ意識、いひかへれば既にこの時期において、ベシやマジが偶然に終止形につくのではなく、これらの助動詞を伴ふことが終止形の機能としてはっきり意識されてゐて、終止形の動きに添って助動詞の接續が必然的に動くものであったと考へなけれ

ばならない。アグがアグルになった結果、從來のアグマジがアグルマジとなり、この形の不都合さがアゲマジを要求したといふ考へ方である。從ってここに、アゲマジの前段階としてアグルマジが用ゐられたことがあると考へなければならなくなる。

アグルマジ型はいはゆる口語資料の中にも

サアラバヒッキッテハイヌルマイゾ（周易抄）

三町には過ぎまらするまい（天草本平家物語）

のやうに若干見られる。口語の文献とよばれるものが口語のすべてではない上に、書かれたものとして殘ってゐる點に既に純粹の口語との間に大きい溝をもち、その背後に廣い話言葉の世界をふまへてゐることを考へ合はせると、たとひ用例は少くともこの型が見えることは重要である。

又ロドリゲスの大文典の否定第一種活用の項その他にも

Agurumai, 1. majij
Aguemai, 1. majij　（土井氏譯一〇八頁その他）

のやうに兩形を並べ示した個所があり(6)、Xinzurumai が出てくるかと思ふと、Voboye majij, Yrauemai が出て來たりする。これらの事實から考へて、口語の世界にアグルマジ型がある程度行はれてゐたことは否定すべくもないし、その底流として、終止形接續に對する認識を見てとることができる。

しかしながらこの認識は確とした自覺を伴ったものではない。これが自覺にまで高められるには、ある程度の言語反省が必要であったはずである。從って或る反省が加へられたものを取上げる時、この認識の存在は一層確かめられることになる。その一つの場合として改めて文語文献に目を向けて見たい。

（四）

文語を書くことは、慣れといふ要素を除外すれば、それと口語との間隔が大きければ大きいほど、書き手のもつ緊張は大きいと考へられる。勿論文語には文語としての體系があり、その體系をのみ込んだ上で表現活動が行はれるはずであるが、そこには絶えず反省を伴ふがゆゑに緊張を生ずる。この緊張が弛んだところに口語的ないひ方がまじり、過度の緊張から更に反省過剰に陷り、あらぬ方向にふみ込むと、口語にひかれた從來にないやうないひ方が出てくるものであらう。いはゆる「文法上許容スベキ事項」の中にはかゝる事情のもとに出來上って行つたものもあると思はれる。このやうな點を捉へて、文語を通して見た口語の姿、緊張の奥にひそむ書き手の言語意識を探ることは、特に言語の變化を追究する立場にとっては、或る程度有效な手段と考へられる。

ベシとマジが二段系動詞に接した場合、文語文では新終止形に接した形がしばしば目につく。

逃ぐるべき方（沙石集）

おきな名は上中下によらずつくるべし（大上臈御名之事）

汝等に後れて千年を經るべきか（曾我物語）

二ぢうめにかぎかうろばんにすゆるべし（よめむかへの事）

揚句ヲ書キ懷紙ヲバトヅルベシ（長短抄）

發句に遠カラヌ時節ヲスルベシ（〃）

此句の體ヌルマジキ月ニネサセ（〃）

この形の出かたは口語文に比してずっと多いやうである。この頃の文語文にはマジは案外に少いから、目下の問題になる用例も少

いが、ベシの方はかなりよく現れる。ここには、恐らくベシは古い言葉では終止形につくぢやないかといった氣持が働いてゐて、そのために新たに終止形の位置を獲得して來た形にベシを接せしめたといふ事情を想像できる。

しかもこの現象は、決してベシ・マジにのみ見られるものではない。例へば禁止の終助詞ナは本來終止形につくものであるが、この時期には、ロドリゲスが下品ないひ方であるといった（土井氏譯大文典一一四頁）見セナ・上ゲナに類する形が

取らせられな、露いて下されな（天草本伊曾保物語）
忘らせられな、改めな（天草本平家物語）
歸られな、逆へられな（毛詩抄）
敵に笑はれな（かくれ里）

の如く散見する一方

かまへて御分離るゝな、うしろばし見するな（曾我物語）
名乘らで切らるゝな。朕が恩を忘るゝな（義經記）
入れらるゝな（天草本平家）

右の約束を變ずるな（天草本伊曾保）

も見られる。前の形は殆ど口語文にばかり見られるものであり、後の形は文語文に比較的多い。これも又、終止形の變化に引きずられてナの接續がゆれ動いた結果と解せられる。

接續助詞トモも從來は終止形接續の語であった。ところが

たとへ生くるとも久しからず（沙石集）
永劫をふるともかなふまじ（曾我物語）
何とわ君が仕度するとも（義經記）
誰人につかふるとも（ぎや・ど・ぺかどる）

序ニコソ大ヲ加ルトモ（毛詩抄）

のやうに新終止形に接したものが文語・口語を通じて非常に多く見られる。

又、副助詞バカリは、古くは

優なりとおぼゆばかりすぐれたるとは（源氏　帚木）
ひとへに思ひ定むべき寄邊とすばかりに（〃　〃）
人目に見ゆばかりなるは（〃　葵）
庵なども浮きぬばかりに雨ふりなどすれば（更級日記）

命に換ふばかり思ひ入りけん（無名草子）

のように終止形接續も普通に見られるが、この時期になると

感涙も流るゝばかりに（申楽談義）
こゑたつるばかりぞ（曾我物語）
あこがるゝばかりなり（義經記）
つなぎ殺さるゝばかりなり（猫の草子）

のやうに新終止形接續ばかりになってくる。この一連の現象を通して、終止形に接する語といふ語法意識が認められるのである。そのきっかけは終止形連體形合一の動きであることは、ここまでくるともう動かない所であらう。終止形が變ると、これに接する語も元の接續形式を保つことができず、新たな終止形に接して行くべきものであったわけである。

かくして終止形につかねばならぬといふ意識は、文語を書くといふ緊張のもとではより表面化し易かった。逆に口語文献では、口語を書く氣樂さからより身近な形が多く出たものであらう。

（五）

元から終止形連體形が同じ形であった四段活用、元から連體形接續であったラ變活用のものではこの變化が殆ど起らなかったことは、終止形接續が必ずしも絶對的に不都合ではなかったことを意味する。終止連體合一の現象に見られる二段動詞の特色は、新終止形にはルが添加されてゐて、終止形の音節數が從來より增加したといふ點である。

金田一春彥氏などが言って居られるやうに(7)、日本人は語の音節數に對しては非常に敏感である。そしてこの感覺は古くからのものであることは、日本固有の韻文のリズムが五音・七音といふ音節數によって構成されてゐることが、何よりも如實に物語ってゐる。このことは五音節・七音節の組合はせに快いひびきを感じたことを示すに他ならないが、同時に五音節七音節を構成してゐる個々の語の音節數が、人々の耳に訴へる感覺に對して重要な役割を果して來たことを示すと考へてよい。

個々の語もしくは語の連續に關して、人々は自分たちが古來聞きなれて來た音節數にある安定感を見出してゐたと考へられる。その音節數が增えたりした場合には、リズム破壞による不安定を感じるものであらう。それ故、ここに見られる音節數增加は重視してよい。

ところが、新終止形自體の音節數も元の終止形より一音節增加してゐるのである。同樣にリズムが破壞されてゐると云はねばならない。しかしながら、これは獨自の必然性のもとに起った現象であり、文の終止に用ゐられるといふ特殊な位置に照らして、そこには音節數以上の大きな力が働いてゐることが豫想できる。その上、古くからある連體止といふやうな語法が、終止に用ゐられる新終止形を生み出す下地として、長い間に培はれて來てゐるのである。このやうな點から考へて、音節數に關しては、終止に用ゐられる新終止形とベシ・マジの接續とを同一に論ずることは、かへって正鵠を失ふ結果とならう。新終止形はベシ・マジを接しうる機能から遠く逸し去るものではないにしろ、これら助動詞が新終止形に接して音節數の增加を容認することにはかなりの抵抗が感ぜられたのではあるまいか。

前に、音節數の少い動詞に未然形接續の傾向が强く出ると述べたことを、ここでもう一度思ひ起す必要がある。動詞が短かければ短いほど增加した音節數の占める比率は大きいのである。從ってそれから受ける不安定感も大きいわけである。これに對して未然形接續では動詞自體の音節數は元と變らない。吾々が書ケルにマイをつける時、カクマイでは意味がずれるし、カケルマイでは不安定を感じ、カケマイにおいて安定を見出すことは、未然形接續が語法として固定したことに支へられるものであらうが、この支へそのもののでき上る過程にあっては、耳新しい形に對する抵抗よりも言葉のリズムの破壞による不安定感がより强かったのではないかと思ふ。

先に私は、辭書にあげられた動詞を眺めた際、短い動詞に崩れた形の出易いのはそれに對する抵抗が少いためであらうと述べた。一見今述べたところと全く逆のことになる。けれども語を文中において機能しない單一の形で捉へる場合と、他の語を下接せしめてその語固有の意義以外の意味を併せ示す場合とでは事情が異る。吾々が文節を切って發音しないのは、一文節を分ちがたい音のまとまりとして感じとることを示すから、單語としてあげる

場合とは感じ方が違ふはずである。

單語を品詞にわけて眺めると、個々の品詞には特定の音節數をもった語が非常に多い。假に國語研究所編纂の「語彙調査――現代新聞用語の一例――」に示された一ヶ月に十回以上用ゐられた語を音節數によって分けると次のやうになる(8)。

	名詞	動詞	形容詞	副詞
一音節	11	0	0	0
二音節	120	84	7	18
三音節	60	160	26	36
四音節	10	84	11	45
五音節	0	10	5	4
六音節	0	0	1	2

この傾向は、どんな語が最初に出來るかの問題にもからみ、その品詞の機能にも關係をもちつつ形成された結果であらう。しかし一旦このやうな傾向が出來上ると、人々はある音節數に最もその品詞らしさを感じ、基準音節數ともいふべきものを意識の中に作り上げて居たのではないかと思ふ。そして、單語は或る音節數をもって固定すると、いちおうその音節數を保たうとはするが、機會があれば基準音節數に近づかうとする力をも備へてゐたとの豫想を私は立ててゐる。その場合、名詞では二乃至三音節、動詞なら三乃至四音節あたりに基準音節數がくるものと思はれる。關西方言で一音節名詞を長くいふ傾向はまさにこの現はれであり、辭書で一二音節動詞を新終止形で示すことが多かったのも、又これにつながるものであらう。

ベシ・マジが接した場合は文節としての音節數を感じとるのである。動詞自體の短かさはベシ・マジの添加によって蔽はれてゐる。そして新終止形に接續することは、ベシ・マジの表現に向って用意された以外には、何らの內容の增加を伴はぬ無意味な音節增加である。これは、その文節の音節數に對して元から抱かれてゐた安定感にとっては容認しがたいことであったであらう。

未然形が新終止形に變るべき形として選ばれた理由は別に考へられねばならないにしても、以上の如くして音節數の問題がこの變化を推進した一つのファクターとなり得たと思ふのである。

（六）

今までに上一段活用については觸れなかったが、上一段活用は元から終止・連體が同一の形であり、音節數の增減と無關係であることは四段系のものと同じである。ところが四段に對して接續形式を殆ど變へなかったベシ・マジは、上一段に對してはいち早く二段系以上の頻度をもって接續形式を變へてゐるのである。

是ヲバイベキカイマジキカ……終ニイベキニゾ定ニケル（源平盛衰記）

ワガ身ノ分際ヲ顧ミベシ（申楽談義）

面も位に相應たらんをきべし（申楽談義）

餘の所をばいべからず（曾我物語）

それをよくみべし（どちりな・きりしたん）

深く省みべき者也（ぎや・ど・べかどる）

祿位ニキヘキ法ナリトヲシユルナリ（論語抄）

これも一つのリズムの破壞であり、ベシ・マジの接續の變化の原

因が、音節數のみでは說明しきれないものを持つてゐることを意味してゐる。ところがこの活用に對して、上代では終止形接續の助動詞はミベシ・ニラシのやうに體のつかぬ形に接するのを普通とした。體に助動詞のつきにくいことを裏付ける現象に他ならない。この傾向は、歌の世界では次の時代の初期まで持ち越されてゐる。

朝なけにみべき君とし頼まねば思ひ立ちぬる草枕なり
（古今集三七六）

來てみべき人も有らじな我宿の梅の初花折りつくしてん
（後撰集二三）

白たへの浪路を遠く行き交ひて我ににべきは誰ならなくに
（土佐日記）

この頃から終止形接續になつて行つたのであるが、恐らくミベシが古くからあつた形で、ミルベシは、上一段だけに見られる異例を除いて、他の活用に對する接續形式と統一をとらうとの意識によつたものと考へられる。それだけに體に接したミルベシ型は不安定なものであつたに違ひない。この氣持がミルベシを再びミベシに戻す下地になつたとともに二段系のものをもここへ引きつける力として作用したことであらう。

なぜならば、終止形が連體形に合一して行くことは終止形が體を獲得することであり、二段系の活用に對する接續をも體につくといふ不安定さの渦へ巻込むことになる。しかも上二段活用は更に上一段化の動きをもち、從來の二種類の活用が一種類にまとめられて行くのである。上一段にとつては從來の不安定さに對する支へが取除かれることになる。ここに至つてミルベシの底に流れてゐた體接續を忌避する氣持が表面化し、二段活用ともども上一段もミベシに歸る結果を引起したといへよう。

（七）

以上はベシ・マジの接續が何故變つたかに對する考察である。ここで從來の終止形がベシ・マジの接續形として孤疊を守らなかつた理由につき一言すれば、人々が自分達の日常口にする言葉とは別の體系に屬する文語の中にこの形を置いて、始めて理解しうるやうになつて行つたといつた事情を考へる事が許されよう。漢字一字の男子名として固定したように概念きりの形式としては捉へることができても、文中に置いた場合には、何ら下へ續くことのできぬ凍結した形として、とけ難い異物感を與へたものであらう。ベシ・マジばかりでなく、ナもトモもバカリも一齊に接續形を變へたことはこのことを證してあまりがある。舊終止形のもつ古さの感覺がベシ・マジの接續の上にも働いて、從來と異つた新しい形を要求したのである。

次に變つた結果なぜ未然形が選ばれたかを考へねばならない。二段系のものが音節增加と體への接續を避けるとすればこの形しかなかつたわけである。これをあへて未然形と斷ずるのはサ變・カ變の場合に照らしてのことである。四段系動詞に對しても一時的にゆれ動いたが、その際選ばれたのも未然形であつた。たしかに積極的に未然形に向ふ力が働いてゐたと考へねばならない。

ここで注意すべきはベシもマジもともに推量表現に關與するといふことである。古代語では推量の助動詞の種類が極めて多いがこれが未然形接續と終止形接續とに截然と分れてゐたことは、山

田孝雄博士が推想と設想とに分けられたやうに、兩類の間に性格の差が存したことを意味する。その差は大體上接の動詞の示す動作・狀態の實現性の確不確、更にいへば未然、終止の活用形の差に對應してゐたのではないかと思ふ。近代語ではこれが大幅に減少して、肯定ではム・ムズ、否定ではマジが生き殘った。このことは、ともに未經驗の狀況を示す意味において、從來の推量の助動詞が分擔してゐた表現をある程度これらの助動詞が包括したことを示す。卽ちマジはジの、ム・ムズの直系ウ・ウズは、足りないところを他の語の助けを藉りて補ひつつ、ベシその他の表現を統括して行ったと見られる。

ベシやラムもいちおうは用ゐられるけれども、ラムの如きはツラウ・ウズラウといふ複合形態をとる以外はむしろ稀であって、用法が狹められてしまってゐる。ベシはこの時期にもかなり出てくるが、恐らくは漢文訓讀の影響からであらうか用法が局限されてゐる上に、ウ・ウズとの間にほぼ文語・口語といふ領域の差があるやうである。ロドリゲスも

> 書きことばの未來に使ふ助辭も亦種々あるが、その中のあるものは理解しがたい。……その助辭は次の通りである。

として、ベク・ベキ・ベシをあげてゐる(9)。

文語體の抄物と口語體の抄物とを比較すると、前者ではベシがずっと多くかつ自由に用ゐられ、後者ではウ・ウズがこれに代り、ベシは出ることも少い上にその用法は極めて局限されてゐる。卽ちそれぞれの文體の內部において相互に表現性を補ひ合ったといへる。同一文獻の內部でも

> 各世家ニアラウスホトニ今不載ソ……此モ外紀ニクワシケレトモ世家ニアルヘシ（史記抄卷二）

のやうに、ウズとベシとが同樣の表現を行ってゐるものがまま見出される點からも兩者の接近がうかがへるが、文語體・口語體の更に刻明な比較によってこのことは一層裏付けられると豫想される。

このように考へてくると、ベシ・マジの接續を未然形に引きつける下地は十分に熟してゐたわけである。活用形が助動詞・助詞の表現に對して用意されたものであるならば、終止形接續が垣を越えて未然形に向ふことは當然あり得ることと考へられる。時も時、ベシ・マジは從來の終止形接續を捨てざるを得ない瀨戶際に立たされたのであった。この際選ばれる形としては未然形が最も適切であったはずであり、ごく自然にこの形へ移って行ったものであらう。

（八）

以上の如く、ベシ・マジの接續面が種々の形をとることは、ベシ・マジ獨自の性格、もしくは助動詞としての性格によるよりもむしろ動詞の動きに强く左右されてゐたと考へられるのであり、これは始めに述べたやうに助動詞の變化を追究する立場においては特に重視すべき要因である。

カ變・サ變に對しては、現在に至るまで種々の活用形式が存しなかんづく地域差が大きいことは、この二つの動詞が獨自の活用形式をもってゐて類型の動きに必ずしも影響を受けないことにもよらうが、活用形式自體の地方差が大きいことにも起因してゐると考へねばならない。

推量の助動詞の種類の減少や、二類の接近すらも、動詞における變化の影響のもとに起ったことで、ベシ・マジの接續の變化と相依り相扶けて新しい體系を創造して行ったといふのが實情かと思はれる。

その動詞の變化の奥底に人々の意識の移り行きが見られ、助動詞に對する意識も動くが、音節數に對する好み、助動詞と靡を切り離さうとする氣持等の變らないと思はれる意識がこれにからまり合って、新たな未然形接續が發生したといふのが一おうの筋道である。

× × ×

注①…今後扱ふ時代においては、ベシはベシイ・ベイ、マジはマジイ・マイの形でも現れるが、便宜上これらを括る形としてベシ・マジを使用する。

注②…湯澤幸吉郎氏の「室町時代の言語研究」には、マイは四段活用のウ段又はア段に連るとして、

諫メタレトモフットキカマイニ、人ノ心ニアワマイホトニ（史記抄）

諸天ハ花ヲフラサマイソ、次公ハ此理ヲシラマイソ（四河入海）

等があげられて居るが、今まで目にふれたところでは他の一、二の抄物や雜兵物語にごく少數見えるだけで資料的に限られてゐるやうであり、これ以前には見當らず、これ以後にも殆ど姿を没して行く。

注③…この表にいふ音節數は上接の語の古代語における音、數を示す。出典の略号は次の通り

字＝宇治拾遺物語、朝＝朝顔の露の宮、義＝義經記、花＝花世の姫、ぎや＝ぎやぎや・ど・ぺかどる、どち＝どちりな・きりしたん、曾＝曾我物語、無＝無言抄、呉＝呉子私抄、唐＝唐糸草子、長＝長短抄、今＝今川大双紙、沙＝沙石集、大＝大上臈御名之事、磯＝磯崎、近＝近來風體抄、申＝申樂談義、三＝三人法師、文＝文正草子、正＝正徹物語

注④…ここの出典の略号は次の通り

平＝天草本平家物語、伊＝天草本伊曾保物語、中＝中華若木抄

注⑤…橋本進吉博士が「上代に於ける波行上一段活用について」でいはれたやうに、いち早く「フ」が「干ル」になった現象も、一音節動詞の不安定さを思はせる。

注⑥…全體の用例としては Aguemai の方が多い。同樣の例はコリャードの日本文典にも見える。即ち否定第一活用の項に、

否定未來形は根或ひは肯定現在形に mai 或ひは maji を加へる。例へば

ãgue maji 或ひは agúrmaji（大塚氏譯三七頁）

こちらの方は全體の用例として ãgurúmai を多くあげてゐる。

注⑦…ことばの研究室1「リズムについて」。訪問客の名は忘れたが、字數だけは覺えてゐるといふ話があげられてゐる。

注⑧…漢語と考へられるもの、現代人の意識でいちおう複合

語と認めうるものを省いた。同一語でも、本書でわけてのせてゐるものは、それぞれ一つと考へてとりあげた。語源的に同一だが今は明らかに異るものと、全くの同一語のけじめがはっきりしないためである。

この表に見られる傾向は、あくまで現代の基本語彙に見られる傾向であり、實際にはもう少し音節數の多い方によるであらう。又、名詞はあまり時代的變化がなからうが、古代語では動詞はもう少し音節數の少い方へかたよるであらう。

注⑨…土井氏譯大文典一六五頁。なほコリャードも「文語に於ける動詞の活用に関する若干の規則」の中で次のやうにのべてゐる。

前述の肯定形から ru を除き、それに助辭 bègi を附加へると肯定未來形となる。否定未來形は肯定形に bècarazu を附加へればよい（大塚氏譯一〇七頁）（一九五五・六・一七稿）

—京都大學特別研究生—